

# T A O G E N

発行人◎高田かつ子 編集人◎青山富士夫 事務局◎〒211 川崎市幸区小倉1-1, I-514 下山昌孝方 TEL 044-522-4185

## 足摺岬巨石群の調査進む

### 大自然の造型と人工の複合が

足摺岬近辺に広がる巨石群は、同地方の古代海洋文明を物語る遺跡である、との発想から、地元の土佐清水市と古田武彦氏が、協力して着実な基礎調査が進められている。このほど第一次から第四次までの調査結果が、古田武彦氏によってまとめられ、概報Ⅲとして土佐清水市教育委員会に提出された。その後半の要点を紹介する。(編集部)



昨年十一月には、地域の最高峰白皇山(394m)の第二峰に当たる佐田山(Bサイト)の頂上にある三列石と、それを円形にとりまく巨石群の、俯瞰撮影が行われた。これは軽気球にセットしたカメラを、地上からリモートコントロールで操作するという新方式によるもので、リコー株式会社研究開発部の技術者坂本泰三氏(個人)と、青高館有限会社狩野正好氏らによって実施された。その撮影は理想的に成功し、従来は樹木の間で隠れて見えなかった巨石群の配置の全体像が明らかになった。(写真)

ひき続き、今年三月には、城西大学加賀美英雄教授(岩石学)ら数人によって、付近一帯の巨石の観察調査が行われた。その結果をなるべく平易にまとめると、付近一帯の巨石は、大自然の力による造型を基本としながらも、大略三つのグループに分けて解釈される。第一は、長年月

の自然風化の結果複雑な石組みが形成されたもので、鏡石と呼ばれる巨石など、当分はこのグループに入れておくのが妥当であろう。第二は、風化して円みを帯びた、コアストーンと呼ばれる石を、環状に配置した可能性があるもので、佐田山Bサイトや唐人駄場などの環状石がこれに当たる。第三は、同じくコアストーンを、きわめて人工的な石組みに仕上げたもので、一部の列石や、通称コヨミ石がこれに当たる。

教授らは、主として岩石の鉱学的成分や節理の方向を精密に調べることによって、以



上空よりみた佐田山の巨石群



# 知られざる人間国宝

古田 武彦

一 「知られざる人間国宝」にお会いすることがある。各地の古代遺跡を訪ねる旅の中で、こういった方々に巡りあうこと、それはたまたま探求の旅の醍醐味である。

土佐の足摺岬、そこでお会いしたのは谷孝二郎さんだ。最初、パシフィックホテルの支配人だった。ただの支配人ではなかった。足摺岬をめぐる大自然と古代遺跡の「通」であった。この方のおかげで、どれだけ当地の研究調査が順調に、また奥深いものとなったか、はかり知れない。

ただ知識だけではない。何のこだわりもなく、巨石群のもとへ案内して下さる。行きたい町へ連れて行って下さる。帰り道も、高知空港へと。しばしば、ご好意に甘えてきた。

二 お聞きした。土佐清水港へ室戸汽船で着いたとき、ご自分の車で

お迎えいただいたのである。有り難かった。

途次、竈（かまど）神社のそばを通った、そのときのお話だ。

この神社の鳥居は道路の、すぐそばに建っている。その鳥居の中の石群は、巨大で、複雑で、しかも一定の節理（石の向き、大自然の形成過程の姿をしめす。）をもつ。

それが、何か巨大動物（蛇か亀か）の首のような形で、崩れ落ち、できている。大自然の造型の妙であろう。ところが、その奥。斜面を登ってゆくと、巨大な女陰石が何体か、立ち並んでいる。女性のシンボルのような形で、巨石が「鎮座」しているのだ。

その一つの、もっとも大きな女陰石の上には、何と、男性のシンボルの形の男根石が、こちら側（海側）へと突出して「上乘せ」されているのである。

その奇観を一見すれば、素人眼には「これぞ人工の造型」と思いたいところだけれど、その問題は、あと

まわしにしよう。

ともあれ、これらの「男根石」や「複数の女陰石」が、信仰と祭祀の対象となってきたこと自体は、疑いが無い。なぜなら、先にのべた「鳥居」の存在、その直前に置かれた小さな社祠（ほこら）の存在が、それを明瞭にしめている。

しかも、現在の鳥居の前、道路をへだてた直前に、一本の古木が並び立ち、本来、これら昔ながらの鳥居の姿を存していたのではないか、と思われる。

というのは、その双樹の下は、斜面。すぐ前の海へと向っている。すなわち、海から来た海人（船人）が、その斜面を登り、この「双樹」の間を通って、あの巨大な女陰石、男根石に「参拝」した、そういう形姿が今もとどめられているのである。

### 三

その時期はいつか。ズバリ言って、旧石器・縄文だ。このような、女陰、男根崇拜は、生殖崇拜だ。この時期に胚胎し、繁栄していたのであるから。

もちろん、それは後代へと受け伝えられた。そのことも疑いが無い。現在も、ここに鳥居と社祠の存在していること、その事実がそれをしめしているのである。

けれども、その淵源はやはり、この形の信仰の栄えた旧石器・縄文期、そのように考えるほかはない。―わたしは一昨年来当地に来て、この神社に接して以来、このように語ってきた。谷さんにも、そのようにお話していたのである。

### 四

さて、その後、当地で問題が生じた。新たに「公道」が建設されることとなり、この神社が「とりこわされる」こととなった。「公」の設計プランでは、この鳥居や社祠を、そのままにしておくことができなかったのである。そこで、そういう「実施命令」が出された。

ところが、意外なところから「障害」がおきた。民間の建設業者が、次々とこれを「拒否」したのである。

「それはどうも。お引きうけできません。」

どの業者も、そのように答えた、という。ついに「公」が折れた。新たに「公道」は迂回し、「竈神社」は無事保全されたのである。

「よかったですよ。わたしも、お聞きしていたことを、大分、あちこちで申しておったんですが、

ああいうものが、大切な、先祖からの古い信仰のあと、文化財である、ということをお聞きしていなかったら、と思うと、ゾツとします。」

谷さんは、くりかえし、わたしに手厚く礼を言われた。しかし、本当に礼を言いたいのには、わたしの方だった。このような、土地の方々のご理解なしには、わたしの力など、「ゼロ」にひとしい。

五

似たような話は、すでにあつた。

足摺岬周辺の巨石群中のハイライト、それは唐人石と唐人駄場だ。はるか、太平洋の黒潮に向つてそそり立つ雄姿は、筆舌に尽くしがたい。

前回にのべた、室戸汽船。深夜（東神戸、午後十一時半。震災後は、大阪南港、午前十二時半。）関西を出発し、室戸岬をまわり、足摺岬に至ると、朝の八時過ぎ。双眼鏡でのぞくと、問題の唐人石が見える。

やがて（土佐清水港で上陸し）その唐人石に登って、千畳敷と呼ばれる平板巨石の上に立つと、今朝通ってきた黒潮の航路が遠望できる。そして真下、前方には唐人

駄場が横たわる。

この光景を見たとき、わたしは「直観的」には、この地が壮大な古代遺跡であることを知ったのである。もちろん、学問的には、その是非の検証のための、くりかえした実験と執拗な探査が必要だったのであるけれども。もしそれが「非」であった場合には、断然そう言う、そうした決意を胸に秘めていた。当然のことだが、幸いに、杞（き）憂だつた。

さて、眼下の唐人駄場。これが「公園」にされた。数年前だ。もちろん「公」の手によって。

ここには、「古代祭祀跡」を思わせる、数々の立石があつた。今も、その一部は周辺部に残っている。けれども、それらの「全体」は「撤去」もしくは「排棄」されるはずだったのである。「公」の実施命令が出た。

しかし、地元の民間の業者はこの命令に「従わなかつた」という。親や祖父たちから、ここが不思議な、おそろしい場所であると聞かされて、育ってきた。だからその「タタリ」を恐れたのである。

その結果の選択。それは「遺跡全体」を公園の下に「埋め込む」ことだった。公園は完成した。しかし、遺跡は、その下に保全されたのである。

それは、業者の知恵、そのすばらしい熟慮の決断だった。

六

今回のメインテーマ。それは岩石学的検証だった。本当は、平成六年度の冒頭、四月の予定だったけれど、赤外線やカラー検査が四月に行われたので、当年度の最後、三月中旬と なつた。

もと、高知大学におられた加賀美教授（現在、城西大学）にご出馬願つた。岩石・地質学の専門家である。けれども、着実な学者として、教えられる点が多かつた。来て いただいた、本当によかつた。素人 眼には、一見「人工」と見える女陰 石・男根石も、実は「自然の節理」 によっていること、その反面、「人工 の付加」部分も確かに存在すること（佐田山Bサイト）など、収穫は絶 大であつた。

それら各報告書をまとめ、平成六年度の概報（Ⅲ）を作成した。足摺岬の巨石群の全容が世に周知される日も、近い。谷さんをはじめとする「知られざる人間国宝」の方々のおかげである。



★★古田武彦氏講演会★★  
6月4日午後一時

「東日流外三郡誌」「偽書」説は崩壊した  
多元の会関東主催／文京区民センター

新・古代学  
古田武彦ととも

多元史観に立つ各研究会が共同で編集を進めていた新雑誌が、題名も「新・古代学」に決まり、七月初旬発行の運びとなりました。主な内容は次のとおりです。

「巻頭」新・古代学宣言 中小路駿逸

「特集1」東日流外三郡誌の世界

東北の真実／和道家文書の概観

和道家文書研究の本領 古田武彦

和道家文書とは 古賀達也

西欧科学史と進化論 上城 誠

「特別対談」上岡龍太郎／古田武彦

「特集2」崩れる偽作説

宝剣額の史料批判／砂上の偽作説／大和櫻の反証ほか 古田武彦

「コラム」和道家文献は断固として護る 和田喜八郎

「エッセイ」

萩原眞子・永田武明・難波 収

「研究論文」

鎌田武志・金川 晋・富永長三

（予価二〇六〇円 新泉社刊）

なお、書店が不便な地域の会員には、

会で送料負担のうえ、お取次する方法も

考慮中です。

考慮中です。

# 困陋の高校日本史、 一元史観の墨守

## 現場教師の実感に立って

晋 永福

### 日本史Aの登場

高校が新学習指導要領の実施二年目に入った。来年はいよいよ社会科学が地理歴史科と公民科に解体される。それに伴って日本史の教科書が、日本史A・日本史Bと大別された。世界史と地理もA・Bと、地歴科は全てA・Bに大別された。他方の公民科は、現代社会、論理、政治・経済の三科目で構成され、大きな改訂は認められない。(私は国語科の教員なので失礼ながらそのようにしか受け取れない。)地歴科の三科目のA・Bの違いは、標準単位数の違いに集約されよう。Aは二単位(週二時間)、Bは四単位である。AはBの簡略版。忌憚なく申せばこれに尽きる。案の定、各Bは昭和四十年代に高校生だった私の教わった内容と、ほとんど変わらない。では、ニューフ

エイスのA、ことに日本史Aとはどんな教科書なのか。答は標題に示したとおりだが、教育現場に従事する、日本史の門外漢の抱く危惧を、杞憂かどうか検証していただきたい。

### 一、日本史Aと日本史B

#### の謳い文句

今回の学習指導要領の改訂にあたって、文部省が日本史をどう扱っているかを、「高等学校学習指導要領解説 地理歴史編」(平成元年12月文部省)から抜き出してみよう。

「第1章 総説3 改定の要点」から

「日本史A」は、「我が国の古代・中世史および近世史を概観する学習」に続き、近代社会が成立し発展する過程について、諸外国との接触・交流など我が国を取り巻く国際環境との関連に留意しながら理解することが

できるよう内容を構成した。

「日本史B」は、我が国の歴史の展開について、世界史的視野に立って各時代の特色および変遷を総合的に理解させ、我が国の伝統と文化についての認識を深めさせる。とともに、世界の中の日本という視点から学習できるように内容を構成した。

(「は報告者」)

日本史A・Bを設置したのは、多様な選択を可能にし、生徒の特性、進路等の一層の多様化に対応しようとしたものであると、文部省はいうが、Aは就職者用、Bは進学者用との性格がかなり露骨である。その選別の中で、さらにAでは古代から近世の概観という、歴史学習としてはほとんど暴挙とも呼ぶべき構成を行い、Bでは早くも「右傾化」の批判が上がっていたが、その通りの構成になったようである。「多元的古代」研究会のみなさんには、日本史A・Bの「内容とその取扱い」の所を紹介する。

「第2章 各科目 第3節 日本史A」

(1)古代及び中世の日本とアジア

【国家の形成から戦国時代に至る我が国の歴史の展開について、アジア世界の動きを背景に概観させる。】  
ア 古代国家の形成と大陸文化の

参考文献 山川出版社「新日本史」より

金印

一七八四(天明四)年、福岡県志賀島で一農夫が偶然にほりだしたもの。印には「漢委奴国王」とあり、ふつう「漢の委の奴の国王」と読み、奴の国王が光武帝からさずかったものと思われる。「奴国」は博多付近の小国であった。(写真説明)

邪馬台国

「新日本史」の脚注 ②邪馬台国の位置については、畿内地方の大和に求める説と、九州北部に求める説がある。畿内説をとれば、すでに3世紀には畿内から九州北部におよぶ広域の政治連合が成立していたことになり、のちに成立する大和政権にながる。九州説をとれば、九州北部を中心とする比較的せまい範囲の政治連合となる。そうすると、大和政権は邪馬台国とは別に畿内で形成され、九州の邪馬台国連合を統合したか、逆に邪馬台国が東に進み畿内にはいつてきたことになる。

従前の教科書の脚注 ①邪馬台国の位置については、畿内説と九州説とがある。畿内説をとれば、すでに3世紀には大和政権の前身が九州から畿内にかけての西日本全体をゆるや

撰取

イ 中世社会の展開とアジア世界との交流

(2) 幕藩体制の形成と推移

(3) 日本の近代化への道と19世紀の世界

(4) 近代日本の形成と展開

(5) 現代の世界と日本

(1)の大項目のみ若干詳しく載せたが、(5)までの大項目と比較すれば、「総説」中の「概観」において、いかに「古代」の記述を削減しているかがお分かり頂けよう。次に日本史Bを見て頂きたい。

【第2章 各科目 第4節 日本史B】

(1) 日本文化の黎明 (邪馬台国が成立するまで)

(2) 古代国家と古代文化の形成

【大和朝廷による統一、律令に基づく古代国家の成立と推移及び文化の形成について、東アジア世界の動きとも関連付けて理解させる】

ア 国家の形成と大陸文化の撰取  
イ 律令体制の推移と古代文化の形成

ウ 文化の国風化と地方の動向

(3) 中世社会の成立と文化の展開 (中略)

(4) 現代の世界と日本

(5) 地域社会の歴史と文化

大項目の違いもさることながら、解説中に「邪馬台国」「大和朝廷」の用語が明記されているBに対してAにはその用語もない。また、日本史Bの「(2)古代国家と古代文化の形成」は、従前の「日本史」では「(2)大陸文化の撰取と文化の国風化」という大項目であった。「古代国家」とは勿論「大和朝廷」しか指さないのである。なお「東アジア世界の動きとも関連付け」も新しいが、日本側に「大和朝廷」しかなければ、文部省の意図は直ちに判明しよう。「右傾化」の批判は的確なのである。日本史A・Bの謳い文句だけでも十分に、構成の意図がお見えになったかと思う。従前の「日本史」が右傾化して「日本史B」になったのなら、「古代」から中世を「概観」する「日本史A」の真の目標は何か。古代の具体例で追及していきたい。

一、日本史Bの改訂例

まず、一元史観の立場で、最大のシエアを誇る、山川出版社の「日本史」を継ぐ「新日本史(日本史B)」の古代を覗いてみる。多元史観との差異の露わになり易い、漢委奴国王印、邪馬台国、倭の五王、多利思比孤、大化の改新の五項目についてみ

よう。(資料参照)

(1) 漢委奴国王印の項では従来の「王」はこのような小国の首長をさすのであろう。【の記述が「倭国内の……小国の王であった」と、明らかに格下げと同時に、別の倭国王の存在を暗示するかのよう書き換えられている。

(2) 邪馬台国 従前の「邪馬台国」が「邪馬台国連合」と改訂された。その意図は、本文「邪馬台国」の副ルビに(やまと)とあるように(14ページ)、また、脚注の比較からも察知されるように【大和政権につながる】の一点にある。ただし九州説を無視できず、【大和政権は邪馬台国とは別】の注の出現は評価できる。しかし、「魏志」倭人伝の史料にこそ改訂はなかったが(引用本文は「壹」とあり、注に壹は臺の誤りか、とある)、古田説の出現後の教科書であること

を考え合わせると、畿内説の強弁が目立ち過ぎる。なお、従前の指導資料には、誤解の部分もあるが、古田説「邪馬壹国」の紹介が古代史中唯一載せられていた。今回の指導資料はまだ私は見られない。

(3) 倭の五王 直前の好太王碑文の所で、従前の「倭」が「倭(大和政権)」と明瞭に書き改められた。それを受けて倭の五王につながるように意図

かながらも統合していたことになり、九州説をとれば、3世紀には九州北部を中心とする小規模な統合体が出来ていた程度で、広範な統合の時期はこれ以後のことになる。

大化の改新

(前略) 新政府は、翌六四六(大化二)年正月、四力条からなる改新の詔を発した。それは、(1)豪族が個別に土地・人民を支配する体制をやめて国家の所有とし(公地公民制)、豪族にはかわりに食封などを支給する、(2)地方の行政区画を定め、中央集権的な政治の体制を作る、(3)戸籍・計帳をつくり、班田収授法を行う、(4)あたらしい統一な税制を施行する、というもので、あたらしい中央集権国家のあり方を示している。

政府はこののち、国造のおさめていた国を分割して評(のちの郡にあたる)を作ったり、世襲職の品部を廃止し、あたらしい官職や位階の制度を定めるなどの改革を進めた。孝徳天皇のときに行われた一連の改革を大化の改新といい、こののち七世紀の末にかけて、唐を模範とした律令による中央集権国家の体制がしだいに形成されていった。



されている。史料はそのままなので、五王と天皇の系図が合わない愚は生徒の眼前に展開される。

(4)多利思比孤 本文の記述に大差はないが、史料の所で、改悪が施された。『日本書紀』の削除である。これによって「対等の立場」の一貫性は強まったが、歴史の真実からはまたも生徒を遠ざけることになる。倭国伝の天子↕天子と、書紀の天皇↕皇帝の用語の矛盾が消え去った。また、同記事の一年のずれも消された。これからの高校生には、この基本を改めて知らせないことには、多元史観を伝えることも難しくなる。

(5)大化の改新 多元史観で検討されているONラインを知ってか知らずか(多分知ってしよう)、評も郡も大和朝廷が大化の改新で置いたかのよくな乱暴な記述が現れた。(資料参照)

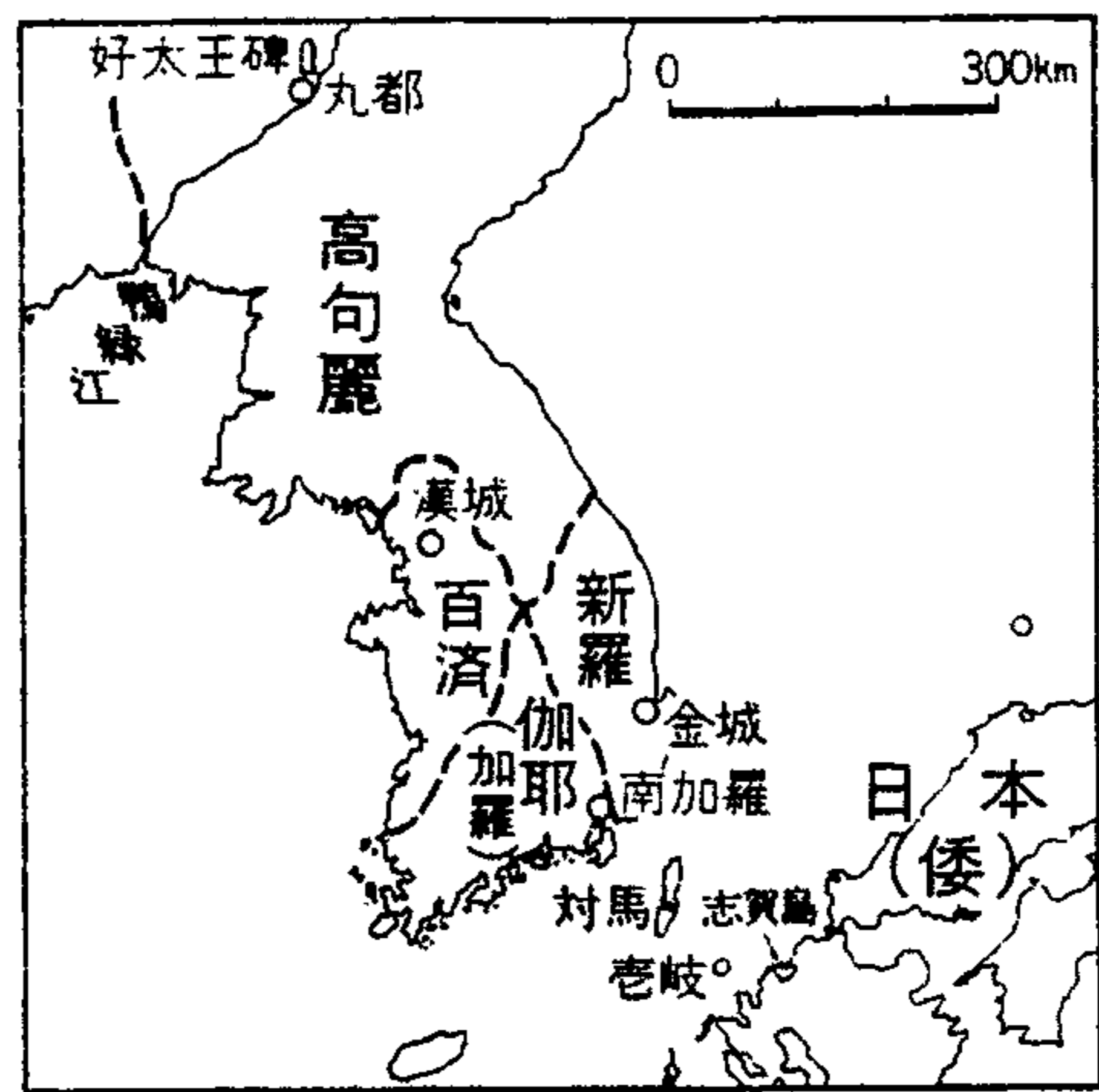
### 三、日本史Aの概括

会員諸氏の博識と理性でご覧頂ければ、以上の指摘の部分だけで、いかに一元史観が歴史の真実からより遠ざかるように、強化されているかがお分かり頂けよう。それでも「日本史B」だと、まだ理性ある若者が、記述と史料の矛盾に気付いてくれるなら、多元史観に出会う機会は残されているといえよう。では「日本史

A」に入ろう。勿論、数社を見渡したが、最大シェアの山川出版社に敬意を払って、同社の「日本史A」を代表として挙げさせて頂く。教科書名は「現代の日本史」。先の漢委奴国王印から大化の改新まで、山川出版社の「日本史B」は二十頁の解説に及んだ。次は冗談抜きにAのすべての概括である。

何と項目別に紹介する要もない。「新学習指導要領」の狙いはあまりにも露骨に達成されたとしか言いようがない。矛盾も何もなく、「我が国唯一の悠久なる大和王朝」の歴史である。それを明確に示すのが、「4世紀の朝鮮半島の地図」であろう(下図)。そこではもはや日本列島の部分は「日本(倭)」と表記されている。後は一気呵成、万世一系の天皇まで書けば、日本史は学習できたのである。「日本史A」は一元史観の墨守どころのものでは済まされない。多元史観の全面拒否か無視か、どちらであろうと、もはや真理を追求する学問・学習とは呼べない代物に墮してしまったのである。昨今話題のオウム真理教の洗脳を嘲笑することもできない。国の文教政策はここに至っては洗脳と五十歩百歩、と言っても過言ではないのではないか。日本国民にどこまで、我が国の

先祖の歴史を歪めたままで教えれば気が済むのか、憤りと嘆息しか出ない。



4世紀の朝鮮半島  
[現代の日本史]より

### おわりに

感想でしかない報告で申し訳ない。「日本史A」がこれから先、どの程度普及していくかはまだ観察を要するが、普及すればするほど日本古代史の真実が、日本国の広汎に渡ってかき消されるおそれのあることはご理解頂けたと思う。教科書が一国の文化水準を示すものと、もし考えられるなら、やはり事態は深刻ではあるまいか。こうなったからには、

全国の高校の日本史の先生方にエールを送るしかあるまい。せめて「日本史B」を採用して下さい。私の勤務する高校は日本史の先生が専任二人、非常勤講師一人といらっしゃる。専任の方一人と講師の先生とは、古田史学とか多元史観に深く関心を寄せられ、私とよく古田先生の著書

を開きながら、古代史をあれこれ語り合う。残る一人は「東日流外三郡誌」偽書論争の時、安本美典側に、どちらかというついでた人である。古田説の存在は十分に承知している。日の丸・君が代には反対で、皇軍の侵略も許すまじのお人であるが、こと古代史となると「定説派」の立場になられる。この極小の現場においてすら、古代史の部分は微妙なものがある。まして、全国の現場に対して多元史観を積極的に知らせていかないと、古代の真実は動かないが、定説しか知らない若者の増大する危険は確実に存在し始めたこと、私には思われてならない。

追伸 実は古典の教科書も、古事記・万葉集など、古田先生が言及された作品が、目立たないが、改定を機に消えていつているようです。目下、古典Ⅱ・古典講読の教科書が揃うので調査を始めたところ。 (筆者は立川市在住、都内高校国語科教員)



高校用日本史教科書は、Aが四種、Bが九種発行されている。教科書は、東京では三省堂書店(駿河台下)、六階教科書売場で入手できる。閲覧は国立教育研究所附属図書館(目黒区下目黒)が便利。(編集室)

# 山田宗睦 日本書紀講座



## 第十・十一回

### 黄泉の国は地下か地上か

この講座も二年目を迎えた。第五段の第六の一書に進むが、この一書は古事記と極めてよく似ている。イザナキ・イザナミの国生み後のお話である。二神は次々と神様を生んでいく。まず、風、食、海、山、水、木、土、火の神である。火の神カグツチを生んだ際、イザナミは焼死してしまう。以後はイザナキの単独行動で数多くの神が生まれてくる。最終的には三貴神（アマテラス、ツクヨミ、スサノオ）の誕生となるが、紀本文ではイザナキ、イザナミが揃って三貴神を生んだが、ここでは古事記と同じくイザナキ単独で生んだとある点が異なる。

講義の楽しみの一つは、通説に対する批判、テキストの説明に対する批判が聞けることではなからうか。

この点、山田講座の面白さは抜群である。本当に広範囲の学説を検討した上で、考え抜かれた自説を主張されるからである。ここではテキストが海と少童をとくにワタツミと読んでいる点を批判されたことが印象に残った。もし海がワタツミなら少童はワタツミではない。少童は赤ん坊と解すべきで、ケレーニの赤ん坊神話論を引用して説明された。折口説は「海童の誤り」とするが、根拠がない。

イザナキはカグツチを大刀で三段に斬ると、そこから次々と神々が誕生する。フツヌシ、タケミカヅチという藤原氏に近い東国の神の祖先もそうだという。書紀の背後に藤原不比等あり、という上田正昭氏の説を支持されるが、三という数字への固執は北九州の倭国史から盗んだことの反映かもしれない、とされるのは「盗まれた神話」説に立つものだ。

やがてイザナキは亡き妻を黄泉、死者の国に訪ねる。黄泉に入る、とあるのは死者の世界は地下という観念がなかったことを示しているのではないか。この点に長い間、気づかなかつたのは、若いころに読んだ土居光知の「高天原・葦原中国・黄泉国」という三段構造論がしみついでいたためである。

もう一つ、イザナキはイザナミの死体を見ていることから、考古学の先駆者高橋健自は黄泉国を横穴式石室と考えた。この説も若いころに読んで強く印象に残っていた。高橋説は神話を反映する横穴式は竪穴式より古いという結論を導いたが、これはもちろん誤りであった。黄泉国は横穴式石室説を克服するのは容易ではなかったが、葬祭と埋葬の関係を明らかにした和田萃説などを手がかりに、イザナキが遺体を見たのは「殯り」の時ではなかったか、と考えるようになった。いずれにせよ、若い時に身についた先入観はいかに根強いものか、つくづくと感じている。

植物、ことに花への言及が多く、しかも意表をつくような説に満ちていることである。今回は桃の話。鬼女に追われて逃げるイザナキという場面、追跡をはばむために水や桃が活躍する。この桃は何なのか。日本の桃は①モモ②山桃、②ケモモの到来、③モモ④ケモモ、という過程を辿った。桃に除魔の力があるという話、大和地方の弥生遺跡から桃の種が出たという話など、話題は尽きない。(木村由紀雄)

## コシオウ神社について

### 小嶋源四郎

佐藤禎宏氏（註1）が一九八二年第二回日本海シンポジウムで、南北文化の接点としての庄内平野を報告された時、古四王社の分布を取上げられたのを、記録で読んだのが、私が「コシオウ」に関心を持つに至った発端です。その後氏の研究は進み、一九八六年コシオウ信仰序説として発表されました。以下にその内容を集約して紹介します。

コシオウ神社、その存在は江戸時代既に指摘されたが、論議が本格化したのは昭和四年喜田貞吉氏の論考に始まる。既に百を超す研究文献が出たが、その性格、歴史上の位置付けは未だ必ずしも確定していない。

神社の社殿は北面（祖形）し（註2）、祭神は大彦命、神体に自然石が多い。北は米代川、南は信濃川、東は奥羽山脈の日本海側に限られた

地域に六十九社を数える。域外では東北地方太平洋側に五社、富山、島根に各一社あるが(註3)、多くは後世の勧請によるものである。なお山形県下にコシオウ又はそれに近い音の地名が三十八カ所も採録出来(註4)、うち七カ所に神社がある。社名表記は七十六社中、「古四王」が四十三と最も多く、他に「腰王」以下十の用字例がある(註5)。ここでは共通音「コシオウ」を使用する。域内六十九社の分布を用字別に見ると、新潟北部、山形庄内地方及び秋田県は略「古四王」に齊一されているのに対し、新潟・福島阿賀川流域、山形の内陸部は使用文字が一定せず多彩である。それで地域を二分し前者を北方分布圏、後者を南方分布圏と仮称する。

北方分布圏はより厳密な意味で城柵設定地に比定出来る。そこでは南から「進出」するものに反抗する蝦夷に対し、コシオウの利用と古四王信仰の加飾が考えられる。古四王の文字が採用されているから成立は九世紀で八世紀が上限かと思われる。南方分布圏はこれに先行しよう。

この地域には稲作の定着、古墳文化の浸透、出羽建國以前の建郡があり、当然文字の流入も早く、「コシオウ」に当る任意の文字の採用があったと

思われる。七〇〇年前後までと推定したい。

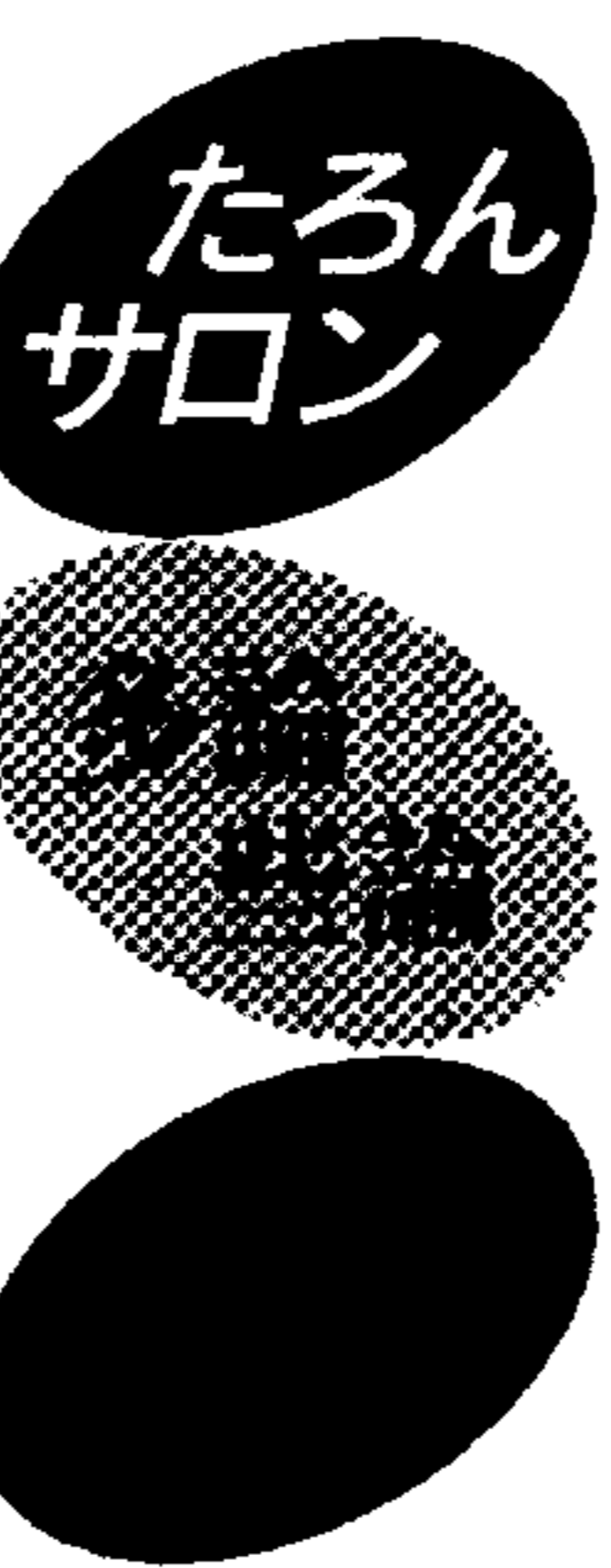
コシオウ信仰の淵源探求に当って先ず四天王説と越王説の論争があったが、そのいずれも「征夷」の経過で把握する点で一致している。しかし北方を神聖視するコシオウ信仰自体は文字表現以前から存在し、東南面を重視する稲作農耕民族の信仰とは系譜を異にする。北面する社殿は北極星や北斗七星を重視する北方信仰であるとしたら、海上を往来する海人族(例えば安部氏)。北の広大な大陸に住む民族的発想こそ淵源ではなからうか。これを環日本海文化の流れの中で把握しようとするのは無理であろうか。

### 若干のコメント

1. コシコウは越王、古志王または高志王いずれもコシの王に由来すべきではないか。祭神大彦命は記紀による附加に過ぎない。記紀国生み神話では記には越はない。紀では一書七、九にはなく、本文、一、六、八では佐渡に次ぐ。越はほとんど埒外、独立国であった証か。
2. 三越分国は七世紀末といわれるが、安倍比羅夫は越国守の称で表記される。斎明紀四年是歳条
3. 元正、養老年間のものと見られる

郡符木簡は、蒲原郡青海郷(現加茂市)小丁高志君大虫に対し、国司の命により告朔儀参列の為出頭の火急命令書を記していた。当時高志君を重く見ていた証とも。同時古志郡もある。各地の王(キミ)が君(キミ)に改称されている事を考えれば、高志君は或は高志王の後裔か。

註 1. 山形県酒田中央高校教諭。山形大学教育



### 続「アラハバキ」を探す

鴨下 武之

◇アラハバキの伝承

「アラハバキ」とは、実態が掴めない影のような存在であるが、僅かに人間臭い伝承も残されているので紹介する。

その一つは、川越市のはずれの老袋という、荒川・入間川合流地点の土手の側にある氷川神社に関するものである。

◆昔、老袋の氷川さまが大宮高鼻の氷川さまと戦って敗れたことがある。逃げて来た老袋の氷川さまが榎の木に「はばき」を掛けた。それでその榎の木を「アラハバキ」とか

学部卒。考古学専攻。

2. 社殿北向は珍しい。関東では鹿島神宮。通説ではエミシ征討の神としての機能をもたされているとされるが、氏は北向信仰の起源について独自の提案をしておられる。

3. 例えば、福島県三春町所在の古四王堂は城主秋田氏が中世勧請したもの。

4. 問題があるもので省いたものがある。序説では36としたが採録したもの38。

5. 腰王10、古志王8、小四王4、小姓3、古将2、胡四王2、コシガミ・巨四王・腰尾・高志王各1

「ハバキさま」という。

つぎは、菅江真澄が寛政八年に津軽を歩いたときの日記「栖家能山(すみかのやま)」に出て来るもので、その部分をそのまま抜粋する。

◆茶亭町をめてに松森のやかたにいと近う、サイカシのとしふる大木の、ふせるがごとき社のうちに祠あり。むかし源九郎義経のはぎまをかけて、神とは斎ひ奉れりといふ。こは松前の西なる磯辺に小山権現とて小山判官のかたはばきを、かく、神といはひまつるのたぐひにひとし。今は松尾の神をうつし奉れど、なべて龜脛藤明神と申すといふ。

これらの話には、「はばきを神として奉った。」という以外にも共通点がある。先ず、義経の場合、本人あるいはその家来が衣川で死なずに、敗走して来たことは、老袋の氷川さまと似ているし、松前は小山判



老袋氷川神社の榎



官となっているが、津軽海峡を渡る間に、何らかの理由で、九郎判官が変化したと考えることもできる。

あとで紹介する老袋の「アラハバキ」は、鳥居のように参道の上をアーチ状に曲がっている榎で、「サイカシ（サイカチのことか）のとしふる大木の、ふせるがごとき」というのも、参道をアーチ状にまたいでいるような風景が連想される。

◇老袋氷川神社の神事

老袋氷川神社には、埼玉県の民俗無形文化財に指定されている「弓取式」があり、毎年二月十一日に、行われるというので、見て来た。

これは萩原法子氏から伺った「弓神事（オビシヤ）」（多元第6号参照）そのものであるが、的は普通の二重丸に黒点を入れたものである。

本来はその年の主役選ばれた五歳位の男の子が弓を射るのだが、最近では部落の役員が替わって射る。

五人が一齐に矢を放ち、的に当たるときの音は、不気味である。

弓が終わったあと、神主が的の痛み具合で今年の天候を占うが、

その直後、周囲にいた子供たちが一齐に的に襲いかかり、バラバラにして残片を奪い合う迫力には驚かされた。これも萩原法子氏のお話の通りである。甘酒と味噌田楽も大量に奉納され、我々見物人も相伴出来た。

「アラハバキ」である榎は、現在は無く、拜殿に飾られている写真を複写した。一の鳥居と二の鳥居の間にあったが、話を聞いた人達の年齢や、一緒に飾られている写真等から見て、二、三十年前まではあったと小生には思える。

◇津軽の「アラハバキ」

夏に予定している、「青森遺跡巡りの旅」の事前調査の機会に、九郎判官の「アラハバキ」を探すことにした。

現在の青森市にも「茶屋町」と「松森」が隣合せにある。青森の神社庁に当たったが、「アラハバキ」に類するものは、末社にも登録されていないという。焦点を松尾神社に絞って、尋ね歩いた結果、松森にあることが分かり、ようやくたどりついたのが、境内が三百坪余りの小さな社だった。

「アラハバキ」の民間信仰の特徴である、軒に大小の草鞋が掛けられており、ここだと確信した。サイカチの大木は無く、古木が二本あり、「松尾神社の由来」と書いてある板

には、何故か「（東）アカダモ、（西）エゾエノキ、樹齢二百七十年位、枯枝の落下にご注意」とだけ書いてある。御神体が二本の古木であるような感じは、木に「はばき」を掛けて拜んだ名残かもしれない。通りかかった老人に聞くと、むかし

ゆるい結合の会を望む



東金市 上林昌太郎

世話人の皆様、ご苦勞様でございます。

私の場合、日本古代史のみならず古代史一般に興味があり、しかもその一部分とは職業上の関係をも有しておりますが、市民の古代研究会にも「古田さんの古代史」の会だから入会したわけで、従って多元の会の発足と共にこちらに移籍するに至ったのは、ごく自然な成行きでした。といった次第で、古田さんを焦点に据える本会について特に申し上げべきほどのこともないのですが、敢えて一事のみ、左に記します。

「多元」は古田さんに共鳴する市民の集りですが、共鳴と言っても、自らテクストを繙いて研究する人から、古田さんのお話をいち早く聞ければとりあえずよしとする人ま

は「アラハバキ」ともいつていた、特に古木を「ハバキさま」といつていたのも、老袋と同じだった。その夜、和田喜八郎氏にお会いし、松尾神社で間違いなかったことが改めて確認された。

で、様々だと思えます。「多元」はこれらの多様な人々をゆるく包み込む会であるべきだと思います。旧「市民の古代」にあった由の、研究派を自称し、古田さんの話を聞いて満足するだけの会員を、自分たちの活動資金の単なる調達源として、一流、三流会員とみなす如きは、古田さんのである、と思えます。「各会員が、各々の立場、力量に応じ、また折々の時間的なゆとりに応じて研究に貢献もし、自ら及び自らの生活を豊かにする一助ともする。勿論、研究に専念、邁進したい会員は大いに研究に専念、邁進する。」このような、全ての会員に開かれたゆるい結合が、会の在り方の根本であるべきだと思います。

以上、言わずもがなの一般論となりました。  
（\*編集室よりランダムに会員の方に、会へのご意見を伺いました。以後、順次ご紹介する予定です。）

# 多賀城碑と古代東北の官衙遺跡

## 四月の発表と懇談の会の発表より

下山 昌孝

坂上田村麿らの古代東北経営の拠点であった多賀城の城跡には、魅力ある多賀城碑が建っている。石碑には「天平宝字六年十二月一日」（七六二年）と制作年月日が記されており、この時代としては、唯一の貴重な金石文資料である。それだけに昔から偽作説が盛んであり、色々に言われてきた。それらの偽作説の紹介とそれに対する反論については、古田武彦氏の「真実の東北王朝」に詳しく述べられている。

古田氏は、石碑の上部に大書されている「西」の一字に注目した。此の一字は、従来色々な人が解釈を試みながら、「西に向かつて建っていたからだろう」という解釈を示すのみで、結局誰も明解な解答を出せずにいたものである。

「西」の下には、多賀城から各地への距離が記されている。

『去京一千五百里、去蝦夷国界一百廿里、去常陸国界四百十二里、去下野国界二百七十四里、去靺鞨国界三千里』

ここには、国界までの距離が示されているが、方向が書かれていない。

これに対して、魏志倭人伝には、帯方郡から邪馬壹国に至る里程、距離と共に方向が詳しく書かれている。そこで古田氏は、「西」は各国の国界の方向を示していると考えた。多賀城から常陸及び下野の北側の国界までの距離とすると、略等距離であるが、西ないし西南側の国界までの距離とすれば、一倍半位の差があってもおかしくはない。そして此の仮説を受け入れると、蝦夷国界も又多賀城の北側ではなくて、西ないし西南側に考えなければならぬと言いうことになる。従来、多賀城は陸奥国にあると、当然のように考えられてきたが、蝦夷国界が多賀城の西南側に在るとすれば、そこは陸奥国ではなくて、蝦夷国の中にあると言いうことになる。此の仮説は、実に画期的なことであって、私自身も始めは半信半疑であったが、続日本紀等を調べて行くと、こう考えた方がかえって事実を正しく解釈できるのではないかと、と考えるようになった。

日本書紀には陸奥や蝦夷の事がかなり記されている。景行四十年には、『日本武尊、陸奥国の境に至る』と

あり、天武十一年には、『陸奥国の蝦夷二十二人に爵位を賜ふ』とあるが、最多出の記事は、斎明紀にある。元年（一回）、四年（二回）、五年（二回）、六年（一回）の記事があるが、その殆どが阿倍臣による蝦夷討伐の記事である。そしてその陸奥国とは秋田、津軽等を指して、太平洋岸にある多賀城近辺をいうものは全くない。

続日本紀には、陸奥国や蝦夷の事が無数に出てくるが、まず文武元年（六九七）と二年にあるのは、『陸奥の蝦夷方物を貢す』である。これは陸奥国が、自分の支配下にある国ではなくて、外国である事を示しているのではないだろうか。霊龜元年（七一五）にも『陸奥出羽の蝦夷等、来朝して各方物を貢す』とあり、これも同様に外国からの使節扱いである。

和銅二年（七〇九）には、『上毛野朝臣安麻呂を陸奥守とす。諸国をして兵器を出羽柵に送らしむ』とあり、いぜんとして陸奥は日本海側である。

天平九年（七三七）になって初めて、玉造柵、新田柵、牡鹿柵、色麻柵、と共に多賀柵の名が記録される。『遣陸奥持節大使従三位藤原朝臣麻呂ら言さく。去りぬる二月十九日を

以て、陸奥国多賀柵に到れり。鎮守將軍従四位上大野朝臣東人と共に平章（むけととのふ）。且つ、常陸、上総、下総、武蔵、上野、下野等六国の騎兵惣べて一千人を追せり。（中略）仍ち勇健一百九十六人を抽きて、將軍東人に委ぬ。四百五十九人を玉造らの五柵に分け配る。麻呂ら餘れる三百四十五人を帥いて多賀柵を鎮む』とあり、大挙して多賀柵に乗り込んだ事が述べられている。更に『副使らを遣して玉造柵、新田柵、牡鹿柵を鎮めしむ』とあり、この時に初めて東北諸柵を鎮めた事が、記録されているのである。

多賀城碑には、重要な歴史的事実が記されている。

『此城、神龜元年（七二四）歳次甲子、按察使兼鎮守將軍、従四位上勳四等、大野朝臣東人の置く所なり。』

『天平宝字六年歳次壬寅、參議東海東山節度使、従四位上、仁部省卿兼按察使鎮守將軍、藤原惠美朝臣朝獺、修造するなり』

このように多賀城碑は、続日本紀より十三年早い神龜元年に大野東人が設置したと記している。最近の発掘調査の結果によれば、多賀城の創建は七二〇年前後とされており（第一期は七二〇年から七六〇年）、続

多元の会・関東主催

古田武彦先生と行く  
青森遺跡巡りの旅



多元の会・関東主催の今年度「古田武彦先生と行く古代遺跡の旅」は、なお発掘が進む三内丸山を中心に青森県地方に決まりました。他、遮光器土偶で有名な木造町亀ヶ丘、八戸市是川遺跡、東日流外三郡誌の源郷石塔山、市浦村山王神社などを巡り、全行程古田先生の熱のこもった解説がうかがえます。日程は下記の通り、現地集合現地解散の二泊三日です。



7月28日(金)

青森駅表口 午前8時30分集合→三内丸山遺跡→青森県立郷土館→垂柳弥生水田跡と歴史資料館→木造町亀ヶ丘遺跡展示館→宿泊・五所川原温泉ホテル

7月29日(土)

五所川原市石塔山→金木町歴史民俗資料館→市浦村福島城跡・オセドウ貝塚・山王坊日吉神社宝剣額→亀ヶ丘遺跡→宿泊・青森市ホテルヴィラシティー雲谷

7月30日(日)

東北町日本中央碑→八戸市博物館(亀ヶ丘式土器展示)→是川中居遺跡及び縄文学習館→解散午後4時・八戸駅前

全行程青森市交通局貸切観光バスによります。  
脅威の亀ヶ丘式土器、日吉神社の宝剣額、垂柳の弥生水田、石塔山と和田喜八郎氏など、注目点がいっぱいです。  
▶参加費 会員45000円(会員外47000円) 東京~青森間の往復交通費以外はすべて含む。  
▶参加お申込は、〒211川崎市幸区小倉1-1, I-514 下山昌孝 TEL&FAX 044(522)4185  
▶参加費の振込は郵便振替で、口座名「多元的古代」研究会・関東/振替番号00170-9-768777  
▶定員は45名で、定員に達し次第締め切らせていただきます。  
▶参加ご予約の方、ご検討の方には、詳しい資料が用意してあります。上記下山方までご請求下さい。また、東京方面からの交通の便は、JR《往路》寝台特急はくつる(上野発22:23)、《復路》はつかり22/やまびこ8(八戸発16:43)他、夜行直通バス(JR、京急など共同運行)など、好便があります。

日本紀の記録よりも、多賀城碑の記載の方が真実を伝えている様である。更に多賀城碑は、天平宝字六年(七六二)に藤原朝頼が修造した、と記しているが、続日本紀には何の記録も無い。しかし、これも最近の発掘調査の結果によれば、多賀城の第二期は、七六〇年代の初めから七八〇年代の初めまでとされており、七六〇年代の初めに大修造が行われたことは確実である。この様な事実に基づいて、東北歴史資料館の解説書でも『多賀城碑が真作である可能性は非常に高まったと言える』と述べている。

多賀城跡は東西約800m、南北約900mの、やや変形した四辺形の遺跡である。その中央部に政庁跡があり、その規模は東西103m、南北116mである。非常に規模の大きい古代官衙跡であり、その創建は七二〇年頃である。

ところが多賀城近辺には、それより古い官衙遺跡がいくつも発掘されている。多賀城から南西に約15キロ離れた仙台市の郡山遺跡は、約500m四方の広さをもち、第一期は七世紀後半、第二期は七世紀末の建設と見なされている。又北に30キロ離れた古川市の名生館遺跡は、東西400m、南北700mの広さをもち、建設時期は郡山遺跡とほぼ同

じである。更に名生館遺跡の南西5キロには、城生遺跡があり八世紀初めの創建と見なされている。これらの遺跡は、規模は多賀城よりも小さいが、中央部に政庁をもち、まぎれもなく官衙遺跡である。

これに対する従来の解釈は「仙台周辺はもとより、それより北の大崎地方まで、かなり早い時期に律令支配が及んでいた事が知られる」と言うものである。しかしこれはおかしい。七世紀後半から八世紀初めにかけて、東北に政庁があったとは、いかなる史書にも書かれていない。たとえ陸奥国が在ったとしても、それが仙台周辺にまで及んでいたかどうか

かは、大いに疑問である。従来の解釈は、歴史的事実と言うよりも、単にこうあって欲しいという願望を示しているにすぎない、といえる。

古田氏の仮説「多賀城は蝦夷国内にあった」によって解釈すれば、郡山遺跡も名生館遺跡も、蝦夷国側の政庁跡であったと言う事になり、無理の無い解釈ができる。多賀城自体は、大和朝廷側の出先機関であったことは確かであろう。しかしそれは、江戸時代の長崎の出島と同じ様な、通商相手国の中に設置した商館の様なものだったのでないだろうか。



# 定期大会と古田武彦氏講演会におでかけ下さい

6月4日午前11時～12時、多元の会関東の定期大会を行います。次年度の活動に向けて、会員の皆さんの提言を求めます。ご参加ください。

ひき続き午後1時より古田武彦氏講演会「東日流外三郡誌『偽書』説は崩壊した―付古代韓国の新発見」が行われます。古田

氏は、巷間のいわゆる「偽書」説に、決定的な反論を挙げながら、寛政の天才的歴史学者秋田孝季の実像に迫ります。

▼会費1000円(一般1500円)。午後5時より古田氏を囲む懇談会。会費1500円。いずれも会場は文京区民センター(都営地下鉄三田線春日下車)

## 事務局便り

◎一九九五年度年会費納入のお願い  
95年度年会費未納の方は郵便振替で左記へお払込み下さい。▼口座名「多元的古代」研究会・関東▼口座番号0017019176  
8777▼年会費4000円、新規入会費は1000円

## 関東史跡散歩の会

### 真間の手児奈の故郷をたずねて

6月18日(日) 午前10時

集合場所 市川考古博物館 ☎0473(73)2202

コース 市立市川考古博物館→下総国分

寺→尼寺跡→下総総社跡→法皇塚古墳→弘法寺→真間の井→継ぎ橋→須和田遺跡  
↓解散は京成市川真間駅の予定  
○JR総武線市川駅北口・京成線市川真間駅から京成バス  
・国分操車場行「終点」下車徒歩15分  
・聖徳学園・国分経由松戸行「博物館入口」下車徒歩10分  
・北国分行き「終点」下車徒歩8分

○北総線「北国分駅」下車8分  
○JR常磐線松戸駅から京成バス 国分経由市川駅行「博物館入口」下車徒歩10分  
【伝言板】古事記を読む会  
▼6月18日(日) 午後1時～4時半  
▼文京区民センター 参加費3000円  
連絡先 西江雄児 ☎048(625)6651

## 定期会のご案内

### 1 発表と懇談の会

▼7月2日(日) 話題提供富永長三氏「真間の手児奈の運命を思う」

▼8月6日(日) 話題提供下山昌孝氏「青森古代史の旅を終えて及び和田喜八郎氏近況」  
その他飛び入り発表も歓迎します。

### 2 万葉集と漢文を読む会

▼6月25日(日) 7月23日(日) 午後1時～5時

巻一 中大兄三山歌について、青山富士夫さんが問題を提起された。

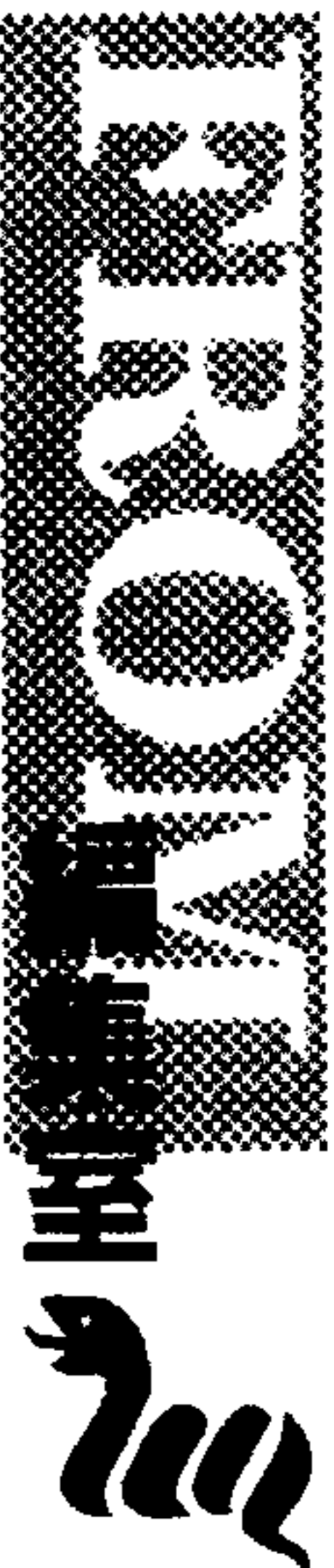
香具山は 畝火雄々しと 耳成と  
あひあらそひき 神代より かくなるらしいにしも 然なれこそ うつせみも 妻を あらそからしき  
この歌で香具山は、と読んでいるが、原文は「高山波」と書かれている。たかやまは、でよろしいのではないか。その場合、高山とは、春日山と推定しつる徴証がある。三山を畝火・耳成・香具山とするチマチマとした世界ではなく、奈良盆地全体を視野に入れたもっと大きな世界を歌った歌なのではないかとされた。

たかやまと 耳成山と 逢ひし時  
立ちて見に來し いんなみ国原  
と明解に「高山與」と読んでいる。このあたりの資料関係を次回に報告したい。「梁書」は百済伝の途中です。

### 3 古田武彦ゼミナール(本会主催)

▼7月7日(金) 午後6時～9時  
従来「和名家文書を読む会」と呼んでい

ましたが、主題は和名家文書以外にも渡りますので、改称いたしました。  
参加希望者は、高田会長にお申込みください。  
▼会場は 1 2 3とも文京区民センター



当会への連絡は、会長/高田かこ TEL048(881)9111 事務局/下山昌孝 TEL044(522)4185まで



◎投稿歓迎 会員の皆様のお声をお待ちしています。〒151渋谷区本町1-7-16-1102「多元」編集室 青山富士夫 ☎03(66377)7869